

もともと筆不精だったけど、いつの頃からかけこうマメに手紙を書くようになった。自主製作・自主上映の映画創りに取り組み、上映活動をするようになってから、必要にかられて筆を持つようになった。

人前で話をするのも、かなり苦手だったけど、これも上映活動をやるようになって、やらないわけにはいかないと思い、ボンボン喋るようになった…。今では、上映後のトークで話に夢中になって、ストップがかかることもしばしばだけだ。

何事も、必要にかられるとやるみたい。誰でもそうかもしれないけど、私の場合、特にその傾向が強い。基本的に不精者、怠け者なんだ。逆に、スイッチが入ると夢中になってしまう。自分でも「暴走」が止められないんだ。自主製作の映画創りなんて、「暴走」そのものだからね。

誰にも頼まれたわけではない。

観てもらってもない映画を、ただ「創りたい」という一心で撮り始めてしまう…。もちろん、お金のメドもない。

恐ろしいことに、どういう映画になるかを、言い出しっぺの自分自身がわかっていない。「暴走」に「暴走」を重ねて、気がついたら何本、何十本の映画が出来ていた、という人生なのだ。

親父への反発から、「映画の仕事だけはやるまい」と強く思っていたにもかかわらず、メシを喰うためにナリワイとして始めた仕事が好きになり、幼い頃から世話に成りっぱなしだった姉が、障がいのある子どもを授かったことを応援しようと撮影を始めた『奈緒ちゃん』で、思いがけず、自主製作・自主上映という映画創りを手がけるようになった…。

どれもこれも、必要にかられてのことだった。

自分にとって「必要にかられて」のことは、案外自分だけではなく、映画を観る一人ひとりにとっての「必要にかられて」に繋がるんだ…ということも、自主上映活動を積み重ねる中で受け止めることが出来たような気もしている。

「他人事」ではなく、「自分事」として、物事を捉え、語りかけることが、自分なりの語り口なんだ…と。

ここのところ、三ヶ月程前に急逝した、40年近くの寝たきり暮らしを、介護の若者たちと生きた学生時代の友人、遠藤滋のドキュメント『えんとこ』『えんとこの歌ー寝たきり歌人・遠藤 滋ー』の追悼上映に取り組んでいる。

又、昨夏完成した、親父の戦時中のインドネシアでの国策映画創りを描いた、『いまはむかし～父・ジャワ・幻のフィルム～』を、今の状況の中で観てほしい、という意味で緊急上映している。

私の映画は、どの作品も〈今、観てほしい〉という意味で「緊急上映」であり、〈思い返してほしい〉という意味で「追悼上映」なのかもしれない。

で、「必要にかられて」、又新作も撮り始めた。まだ内緒だけど、創らないわけにいかないだろう、というスイッチが入ってしまった。又又、「暴走」が始まる。

誰か止めてくれ！と言うよりも、誰か「暴走」に力を貸してくれ！！という気持ちだ…。

「映画の神様」がニコニコ微笑みながら拍手してるのだから、しょうがない。

“映画”にしがみつこうように生きて！

くたばるのだ！！